

# 反閑と地戸呪

— 若杉家文書『小反閑并護身法』の解説から —

田中勝裕

## 〔抄録〕

陰陽道で行われた反閑に関する史料として『小反閑并護身法』という史料がある。そのうちの次第の一つである地戸呪の項には、用途によって呪の内容を変更するという記述がある。

本稿ではそれらの用途に反閑が用いられる時、そこにどのような機能が期待されたのかを探る。

具体的には典拠である反閑局法と小反閑作法の次第の比較や呪の解説（特に地戸呪に関する箇所）を行い、それらが何を目的にしているのかを明らかにすることで、反閑という作法の性格を探る。

る。その上で、反閑の性格と、それが用いられた状況にどのような関係があるかについて考察する。

なお、反閑に関してはいくつか表記があるが、論題など特別な場合を除いて、典拠とされる中国のものは「反閑局法」、陰陽道で用いられた場合は「反閑」に統一した。

キーワード 反閑局法、反閑、天門呪、地戸呪

## はじめに

反閑とは陰陽道で用いられた作法の一つで、中国の遁甲式占に從属する祭法である『隋書』経籍志「玉女反閑局法」、『宋史』芸文志の「遁甲玉女返閑局」などを典拠とする。反閑は返閑・反閑・反敗・反倍などと表記されることもあり、後に陰陽道だけでなく密教や修験道、

さらには芸能の世界へと広がりを見せる作法である。

陰陽道で反閑が用いられる場合、陰陽師が貴人の行幸に際して行う邪氣払いの呪術として機能したとされ、かつては室町時代の百科事典である『下学集』態芸門第十や江戸中期の『白石先生紳書』<sup>(3)</sup>、同じく江戸後期の『貞丈雜記』神仏類之部など記述からしかその実態はわからなかった。その内容は、『下学集』・『白石先生紳書』は、歩行呪

術である禹歩と同様のものであるとし、『貞丈雜記』では「臨兵闔者皆陣烈在前」と唱えながら九歩歩くものとしている。

折口信夫氏<sup>(5)</sup>は禹歩と反閑は同じもので、禹歩の和名が反閑ではないかとした。ただし反閑の語は中国にも見られるため、これが元々日本にあったものなのかどうかは不明とし、よく似たものではあるとしながらも、その詳細については触れていない。また、藤野岩友氏<sup>(6)</sup>は禹歩に関する論考から反閑を考察し、禹歩とは反閑の略法ではないかとしたが、やはりその区別は曖昧なものだった。

小坂眞二氏<sup>(7)</sup>は『武備志』<sup>(8)</sup>に見える「釈玉女反閑局法」を元に、『家秘要抄』<sup>(9)</sup>などの記述から陰陽道の反閑の実態を推測、再構成した。それは次のようである。

手には普通刀を執り、先ず吉方に向つて立ち、次に玉女所在の方角に向つてその名を三度呼び、三度天鼓を打ち、三度絞眼し、次に行出すべき方角に向つて五気を観ずる。この間に、印を結び、四縦五横呪などを誦して、禹歩を行う。終つて禹歩の跡を見返らずに三十六歩進み、刀禁呪を行う。

そして反閑局法と反閑を比較し、その差異（反閑局の有無・局への出入の有無・叩齒の忌避）から、反閑は反閑局法を直接継受したものではなく、その間に仲介する書説の存在が窺えるとしている。

さらに古記録から陰陽師が反閑を行うのは以下の事例であることを明らかにした。

(1) 移徙法

(2) 一部の陰陽道祭（玄宮北極祭・呪詛祭・六道靈氣祭）

(3) 行幸

(4) 勝負事（殿上賭弓、競馬、相撲）

また、日本における反閑の記録の初見は『儀式』に見える相撲の時のもので、貞観年間（八五〇年頃）としている。

この後若杉家文書から『小反閑并護身法』<sup>(10)</sup>（以下、『小反閑作法』）が発見され、その次第が明らかとなった。

要約すると、次のようになる。

玉女に事由を告げ、三度天鼓（叩齒）し、臨目し思うことにより体内から五気が生じ、それが神獸となることを観想する。勸請呪、天門呪、地戸呪、玉女呪、刀禁呪、四縦五横呪などを順に唱え、刀で地に符を書く。その後、禹歩を行い、立ち止まって呪を唱え、最後に六歩歩く。

これら一連の次第が明らかとなり、反閑では確かに禹歩は用いられるものの、あくまで作法の一部でしかなく、反閑と禹歩は同義語ではないということが判明した。

なお村山修一氏の解題<sup>(11)</sup>によると、『小反閑作法』は建長二年（一一五〇）の写本であるが、奥書からその原本の成立は仁平四年（一一五四）三月二十日以前と思われ、また、同じく奥書に見える名前から安倍氏の作法であったとされる。

その後、小坂氏<sup>(12)</sup>は『小反閑作法』の発見を踏まえ、さらに分析を進めた結果、陰陽道祭に五帝祭と荒神祭が、そして反閑が行われた可能

性がある祭祀として宅鎮祭が、勝負事には歌合がそれぞれ追加された。また『小反閉作法』の勸請呪に現れる神格が密教・道教が入り混じっていることから、反閉は十世紀後半に雑密・道教などの様々な要素が組み合わされて作成された法であるとした。ただしこの時点で反閉局の知識はなくなっていたため、遁甲式占に従属する祭法としての意味はなさなくなっているとしている。

さらに、陰陽道における反閉は院政期に完備されたが、鎌倉期以降になるとより簡便な身固が行われるようになり、移徙法や行幸の威儀など権威の象徴として行われるようになったとしている。

酒井忠夫氏は反閉の典拠となった反閉局法は、『隋書』のものよりも『宋史』のものの方がふさわしいのではないかとした。その理由として氏は陰陽道の反閉に六壬の影響が見られることを挙げている。『隋書』・『宋史』のものはともに佚書であるため確認できないが、そこに見られる書名から、遁甲に関する書であったと推測できる。しかし、『宋史』では六壬関係の書も多く収められているため、このことから唐から宋にかけて六壬が盛んであったことを物語るとし、唐代までは遁甲に属していた反閉局法にも、宋代にかけて六壬式が加えられたのではないかとした。

このことを証明する史料としては、『太上六壬明鑑符陰経』<sup>(14)</sup>に収録される「玉女反閉局」がある。『太上六壬明鑑符陰経』には真武の語が見られることから、その成立は北宋の真宗の頃、大中祥符五年（一〇一二）十月以降、そして記述の中に金・元に対するものと思われる文言が見られることから、南宋から元にかけて成立したものと思われる

るとしている。これは『宋史』の遁甲玉女反閉局とほぼ同じものと推測され、これが日本に伝来し、陰陽道の反閉になったのではないかとしている。

八木意知男氏は、小坂氏が反閉という呼称は反閉局への出入に由来するのだとしながらもその語の意味は言及しなかったのに対し、室町期の百科事典である『増補抄』巻六の六に引用される『十節録』佚文の記述<sup>(17)</sup>から、反閉の目的とするところは気の逆転現象であり、反閉という呼称は「閉を反する（閉塞された状況を打破する）」から来ているとした。これに従うのであれば、先に挙げた返閉は「閉を返す」、反倍は「倍（叛くの意）を反す」、反敗は「敗を反す」など、いずれも意味が通るものとなる。

また、小坂氏の挙げる反閉が行われる事例について、『江家次第』巻九の「十一日小安殿行幸装束事」<sup>(18)</sup>において行幸に際して反閉がなかったことを取り出し、行幸なら行幸全てにおいて反閉が行われたわけではなく、陰陽道の禁忌日に該当するときのみに行われたとした。

この八木氏論を受け、斎藤英喜氏は『権記』<sup>(19)</sup>に見える安倍晴明が移徙法で初めて反閉を行ったことについて、陰陽道の暦注が関係しているのではないかとした。それによると長保二年十月十一日（甲寅）は、陰陽道の暦注では十一日は移徙吉日とされているが、十月の寅の日は太歳日という忌日に当たり、こちらを避けるために反閉が行われたのではないかとした。

その一方で繁田信一氏は同じく『権記』長保二年十月十一日の記事、『今昔物語』などから家宅、特に空き家や空き部屋には危険な霊物が

潜むと考えられていたことをあげ、家宅の危険性を排除する手段として反閉が用いられたとしている。移徙法で反閉が行われるのは、新宅も一種の空き家であり、そこに潜む「よからぬもの」に対抗する手段としての機能が期待されたためとした。また、反閉が取り入れられたことについては散佚に対応していることとしている。

以上まとめると、八木氏論及び斎藤氏論は反閉は八方塞がりの場合に行われる作法、つまりは占いなどの結果次第で行われるとするものであり、一方で、繁田氏論はあくまで邪氣払いや護身法として反閉が用いられたとするものである。この二つの観点は反閉の性格を知る上で重要な点であると言える。

私は拙稿<sup>(22)</sup>において、小坂氏が反閉では叩歯が忌避されたとしたのに対し、天鼓の語に注目し、叩歯は行われたのではないかということを指摘した。天鼓については『医心方』辟邪魅方第十三に歯を指すとある。そこで西岡弘氏の「叩歯考」<sup>(23)</sup>をもとに叩歯の変遷を辿り、反閉に見える天鼓が叩歯であった場合、どのような機能を持つのかについて考察した。また、反閉の中心的性格と言える玉女に関して、いかなる性格なのかについても考察を行った。

このように色々と明らかになってきた陰陽道の反閉であるが、その一方で未だ不明な部分もいくつか残されている。今回扱うのはそのうち、地戸呪についてである。小坂氏によると、地戸呪は移徙法には説あり、行幸のときには唱えない部分があるとされる。『小反閉作法』の地戸呪の項には、「移徙時<sup>マ</sup>有説」、「行幸反閉時ハ自有来追吾者迄不敢起<sup>マ</sup>■<sup>マ</sup>シテ除也」とある。つまり、地戸呪は、移徙法と行幸の際に

は『小反閉作法』に見られる地戸呪とは異なる呪を唱えるということであろう。

何故このようなことが起きるのかについて、『小反閉作法』中の地戸呪の持つ機能から考察していく。それを明らかにすることによって、本来は移徙法や出行儀礼に用いられるなど、移動に関する作法と見られる反閉が、何故それらに關係するとは思えない陰陽道祭に用いられるのかという理由が判明するものと思われる。また、これを通じて江戸期の滋野井公麗の著作である『禁秘御抄階梯』中巻「陰陽道」では「身固者、反閉之略法也」というように身固の一種<sup>ニ</sup>護身法としてとらえられるようになったことを解くことに繋がるものと思われる。

## 第一章 反閉局法と天門地戸

### 第一節 天門地戸の概念

反閉における地戸呪がいかなるものなのかを知るのについて、そもそも地戸とはどのような意味を持つ語であるのかを知る必要がある。また、それと同時に地戸という語が、典拠とされる反閉局法においてどのような位置を占めるのかも知る必要がある。

では、まず地戸とは具体的にどのような意味を持つ語であるのか。松村巧氏<sup>(24)</sup>は唐代の醮斎から、『無上秘要』<sup>(25)</sup>三元齋品・黄籙品に見られる、神々を招くために設置される壇の四門(天門・地戸・日門・月門)を挙げ、さらに『金籙齋啓壇儀』<sup>(27)</sup>から、その四門はそれぞれ壇の亥方(天門)・巳方(地戸)・寅方(日門)・申方(月門)に配置さ

れることを示した。そして、儀礼におけるこれら四門のそれぞれの役割や、醮斎に直接関係しない道教經典（『靈寶無量度人上經大法』<sup>(28)</sup>、『上清大洞真經』<sup>(29)</sup>など）から、天門と地戸について次のように分析している。

「地戸」・「天門」の概念は、抜け出るべき苦難に満ちた世界と、道教信仰を通じて参入すべき望ましき彼岸を意味する概念であると言えるだろう。

そして、このような概念が定着するまでには、道教成立以前から多様な用例と紆余曲折した概念の変遷があったことを指摘する。

松村氏はこの問題を歴史的に考察し、天門は先秦時代（最古の用例は『老子』）から、地戸は前漢代から存在する概念であるとし、次のようにまとめている。

（一）道家哲学の場合・・・修道の極みにおいて参入すべき「道」の世界。

（二）天に対する宗教意識・・・中国西北の崑崙崑山の上空にあるとされる天界への入り口。

（三）天文学・・・二十八宿のうち、角宿。

（四）漢代の自然学・・・天地の気の循環を説明する概念としての天門。その対概念として初めて地戸が成立。このとき、天門は西北に位置し、地戸は東南に位置する。

（五）神仙術・・・特に遁甲と服気における要素。

（六）六朝期道教・・・天界と冥界。ただし冥界が地獄説として発展すると、地戸の概念の意義は失われていった。

このうち注目したいのは（五）の神仙術、特に遁甲方術における天門地戸の概念である。これについて、松村氏は次の二例を挙げる。

・『抱朴子』登涉篇<sup>(30)</sup>

百邪虎狼毒虫盜賊不敢近人者出天藏入地戸凡六癸为天藏六己為地戸也

・『秘藏通玄變化六陰洞微遁甲真經』<sup>(31)</sup>遁甲神經出処序

到玉女門上以左手捧之筭橫著閉門却從天門地戸而去閉門了身形遁

この二例から、「遁甲の術の中の、危難を逃れたり身を隠す術において、「天門・地戸」の概念は重要な意味を持っているのは明らかである」とし、遁甲における天門と地戸は、それを通ることによって現実世界から他の境界へと身を隠す意味があったとしている。

さらにこれに関連して、『黃帝内經素問』<sup>(32)</sup>五運行大論を引用する。

所謂戊己分者奎壁角軫則天地之門戸也

戊土属乾己土属巽遁甲經曰六戊為天門六己為地戸

この記述から、天門と地戸のそれぞれは北西と南東に位置するとし、そこには漢代の自然学における、天地の気の作用を説明する概念とし

ての天門と地戸の思想が横たわっているとしている。

松村氏の例示した三例は『抱朴子』は晋代、『秘藏通玄六陰洞微通甲真經』は真武の語が見えることから、大中祥符五年(一〇一二)十月以降、そして『黄帝内經素問』は唐代と時代的には隔たりがあり、さらに『抱朴子』では天蔵<sup>(33)</sup>・六癸・地戸<sup>(34)</sup>・六己であったのが、『黄帝内經素問』では天門<sup>(35)</sup>・六戊・地戸<sup>(36)</sup>・六己となっている。しかし、天門(天蔵)と地戸を通ることにより隠身できるという概念に大きな変化は見えない。

この概念は遁甲式占に由来する反閉局法にも受け継がれていると考えられる。先の例に従うなら、隠身のためには天門から出でて地戸に入る必要がある。反閉局法とは、一切の吉事吉方がない場合に行う法であり、それは言い換えれば凶事凶方しかない状態から遁れるための法と言えらるだろう。『抱朴子』の「百邪虎狼毒虫盜賊不敢近人」という記述も、凶事(百邪・虎狼・毒虫・盜賊)を近づけない凶事から遁れるということを表していると思われる。反閉局法に見られる避けるべき凶事は盜賊や鬼魅、百惡鬼賊などで、猛獸や毒虫は除かれているものの、ほぼ同じと言えよう。

以上のことをまとめると、反閉局法という法は、遁甲式占に由来する作法であり、そして危難から逃れる法であることから、『抱朴子』の記述をさらに発展させたものと言えるだろう。そしてその目的のためには、天門と地戸の概念は必要不可欠なものと言える。

では、それらの概念が不可欠であったとして、反閉局法における天門と地戸はどのような役割を果たしているのか。

## 第二節 反閉局法における天門地戸の役割

反閉局法とは『太上六壬明鑑符陰經』『玉女反閉局』、及び『武備志』『釈玉女返閉局法』(以下、二例をまとめて「反閉局法」とする)によると、次のような次第である。

- (I) 法を行う際に室内では六尺、庭では六歩、野外では六十歩の場所を確保する。
- (II) 左手に一尺二寸の箒を六本持ち、右手に刀を持つ。旺方に向かつて旺気を吸い、叩齒を十二回行い、旺方に背を向けて表奏する。
- (III) 地に局を作成する。中央に北斗を書き、その周囲に左回りで十二神・八干(戊己を除く十干)・四維(乾・艮・巽・坤)を配する。これは刀で書くが、ない場合は指で書く。
- (IV) 甲日には甲方から、乙日には乙方から入局する。ただし、戊日には乾から、己日には坤から入る。
- (V) 四方神を勧請する。
- (VI) 箒を用いて天門・地戸を成する。このとき、一定の法則と呪がある。
- (VII) 箒を手にして呪を唱える。
- (VIII) 玉女の名を呼び、呪を唱える。
- (IX) 呪を唱えながら、北斗七星に二星を加えた九星を踏む。
- (X) 刀で地に四縦五横図を描く。

以上のことから、式占に由来するだけに、方位や干支に関して嚴格

な法則を持つ法であることがわかる。また、天門と地戸に関しては、一尺二寸の筭を六本用いて「成」にする必要があるようだ。これはどういうことなのか。

「十二局天門地戸返閉立成図」<sup>(34)</sup>によると、天門と地戸、さらに玉女所在の方位は十二支ごとに決まっている。「反閉局法」には「子日玉女従庚上」、「若在庚上便呼庚上玉女」とあり、これを「十二局天門地戸返閉立成図」と対応させれば、庚に玉女が存在するのは子の日と、その記述は一致する。つまり、「反閉局法」では天門・地戸・玉女所在の方位もその日の十二支ごとに決められたものであると思われる。では何故局内において筭を用い、天門や地戸を「成」の状態にするのか。この「成」とはどういうことなのか。

可能性としては二つある。一つは玉女は所在の方角から呼び出すということから、天門・地戸も所在の方角から呼び寄せる必要があるのではないかという可能性。そしてもう一つは、「反閉局法」に見られる「出天門、入地戸、閉金闕」という記述から、閉ざす金闕とは天門・地戸であると想定した場合、閉ざすには開ける必要があると考えられる。「成」にするとは、これらを開けることを指しているのではないかという可能性である。そのために一定の法則に従って筭を用い、呪を唱えるなどして「成」、つまりこれから通過する天門と地戸を開いた状態にしているのではないだろうか。

そう仮定した場合、ここで用いられる筭とは天門・地戸を開閉させるための鍵であると言えるだろう。

そしてこの後、筭を手にして呪を唱える。『太上六壬明鑑符陰経』

「玉女反閉局」と『武備志』「釈玉女返閉局法」では呪の内容に若干の差異があるため、両者を載せる。

・『太上六壬明鑑符陰経』「玉女反閉局」

乾尊耀靈 坤順内宮 二儀交泰 六合利貞 配天享地 永寧肅清 応成玄黄 上衣下裳震離坤兌 翊賛扶持 乾坎艮巽 虎歩龍翔 今日行筭 玉女侍傍 追吾者死 捕吾者亡牽牛織女 化成江河 急急如律令

・『武備志』「釈玉女返閉局法」

乾尊耀靈、坤順内宮、二儀交泰、要合利貞、配天履地、永寧肅清、感成玄黄、上衣下裳、巽離坤兌、翊賛扶襄、乾坎艮震、虎歩龍翔、今日行筭、玉女侍傍、有急相助、常輔扶臣、近我者死、捕我者亡、牽牛織女、化為海江急急如律令

以上の呪は、次第の流れから判断すると、『小反閉作法』の地戸呪に相当するものと思われる。「牽牛織女 化成江河 急急如律令」あるいは「牽牛織女、化為海江急急如律令」と、『小反閉作法』の地戸呪にも見られる記述がある。

・『太上六壬明鑑符陰経』「玉女反閉局」

夫欲遠行見貴人上官赴任者當出地戸入天門乘玉女而行呪曰

天門天門 今日唯良 玉女侍我 左右遊傍 遊行四出 不逢

禍殃 君子一見 喜樂未当所求如意 万事吉昌 急急如律令  
夫欲入陣掩車之事避兵逃難伏匿殯葬凶事即出天門入地戸乗玉女而去呪曰

諸諸訳行無抵日返無抵時随斗入戸與神俱遊天地反復心中所欲皆得随意使汝迷惑以東為西以南為北知我者使汝不得

# ・『武備志』『釈玉女返閉局法』

夫我欲為百事、遠行見貴人上官赴任者出地戸入天門、乗玉女而行、呪曰、

天門天門、今日維良、玉女侍我、左右游傍、行來四方、日出

六甲、不逢災殃、君子一見、喜樂煌煌、所求如意、万事吉昌

夫欲入陣掩捕之時即出天門入地戸、乗玉女而去、呪曰、

諸諸訳行、行不抵日、反不抵時、随斗所指、與神俱之、天地

反覆、中心所欲、皆得如意、使汝迷惑、以東為西、以南作北、

有知我者使汝迷不得

# 『太上六壬明鑑符陰經』『玉女反閉局』と『武備志』『釈玉女返閉局』

法』の記述を比較した場合、呪の語句にわずかな差異は見られるものの、大きな変化は見られず、その目的とする所も変わってはいない。貴人や上官に会う場合の呪は祈願成就を願うようであり、その一方で陣に入る場合の呪は相手を幻惑し、迷わせるような記述が見える。呪の面からも、目的に適うものであったことが窺える。

つまり、「反閉局法」では「出天門入地戸」あるいは「出地戸入天

門」し、呪の内容を入れ替えることによって、吉事吉方がない場合の出行・上官などを訪問する・陣に入り掩捕するときの三種にその目的を変えることができるのである。言わば、この部分が「反閉局法」の目的を決定していると言えるだろう。

以上のことをまとめると、「反閉局法」において天門地戸は不可欠な概念であり、法を実践するにあたって、厳格な法則に基づいて用いられる要素である。また、この天門・地戸にかかわる呪を変更すること、法の目的を三種に変えることができるという、非常に重要な役割を果たす要素であることがわかる。

## 第二章 『小反閉作法』における地戸呪

### 第一節 天門呪・地戸呪の機能

「反閉局法」における天門・地戸の概念と役割は前述の通りであるが、それが『小反閉作法』ではどのような形で扱われているのか。小坂氏<sup>(35)</sup>によると、陰陽道の反閉は「反閉局法」をそのまま継受したものではなく、仲介した書説があったとしている。その後、このことに關して小坂氏<sup>(36)</sup>は、『小反閉作法』の内容から、陰陽道の反閉には雑密などの影響が認められるとしている。

では、実際に「反閉局法」と『小反閉作法』の次第には、どのような違いがあるのか。比較すると、次のようになる。



●「反閉局法」

①局を作成し、叩齒などを行つたのちに、奏上する。

●「小反閉作法」

①玉女に事由を告げ、天鼓（叩齒）を三度するなどして、五氣を観想する。

②局に入り、四方神を勧請する。②勧請呪で仏菩薩や道教神を勧請する。

請する。

③箒を用いて天門地戸を成す。

③天門呪を唱える。

④箒を手にして呪を唱える。

④地戸呪を唱える。

⑤玉女の名を呼び、呪を唱える。

⑤玉女呪を唱える。

⑥歩星法を用い、呪を唱える。

⑥刀を手にして、刀禁呪を唱える。

⑦呪を唱えながら歩く。

⑦四縦五横呪を唱え、地に図を刻む。

⑧乗玉女呪を唱える。

⑧禹歩し、立ち止まって呪を唱える。

⑨刀禁呪を唱え、地に四縦五

⑨六歩進む。

横図を刻む。

このように見てみると、次第の順序には異同が見られるものの、全く違うというわけではない。特に⑥までは、その流れはほぼ同じと言つていいだろう。

次に、次第の内容を見ていくと、勧請する神格の違い、反閉局の有無、箒の使用の有無が挙げられる。それ以外にも挙げるとすれば、次第の中で唱えられる呪の内容であろう。その内容は「反閉局法」、「小反閉作法」ともに一部共通する文言も見られるが、全く違うものである。

特に天門に関する呪では、「反閉局法」では『小反閉作法』のように明確な天門呪というものは見えない。代わりに箒を用いながら呪を唱えることが見える。それは次の通りである。

呪曰、鼠行入穴入狗市、便移子上第一筭安戌上、大呼青龍下、又呪曰、牛入兔園食甘美、便移丑上第二筭安卯上、大呼朱雀下、又呪曰、猛虎耽耽来向蛇、便移寅上第三筭安巳上、大呼勾陳下、又呪曰、兔入牛欄伏不起、便移卯上第四筭安丑上、大呼白虎下、又呪曰、龍入馬廐因留止、便移辰上第五筭安午上、大呼玄武下、又呪曰、騰蛇宛転来申裏、便移巳上第六筭安申上、大呼六合下：（後略）

傍線部が唱えられる呪であり、これらを用いて天門を「成」にすることから、この部分が「反閉局法」における天門呪と言えるだろう。この内容を見てみると、十二支と密接に関係していることがまず挙げられ、次に六壬式占に見られる十二将（青龍・朱雀・勾陳・白虎・玄武・六合）の名も見られる。

一方、『小反閉作法』における天門呪は次のとおりである。

六甲六丁天門自成六戊六己天門自開六甲磐垣天門近在急々如律令

『小反閉作法』では反閉局が存在せず、そのため「反閉局法」のように局内で箒や呪を用いて天門や地戸を「成」にするという次第がな

い。代わりにこの天門呪の内容からは、六甲六丁から成る天門を六戊六己に開くことを求めることが窺える。六戊六己によって開くということは、先に挙げた『黄帝内経素問』に見える、戊己＝天地の門戸の所在と同義と見ていいだろう。

つまり、『小反閉作法』においては天門の位置は一定のものであったと思われる。また、『抱朴子』のころから地戸＝六己であること、そして戊己が「天地之門戸」であるという記述に基づいたなら、この天門呪は天門を設定して開けると同時に、地戸をも設定し、開けていると考えられる。

では、そう考えた場合、天門呪に対応する地戸呪では、一体何を目的としているのか。

『小反閉作法』の地戸呪を見てみると、次のようである。

九道開塞∴有来追我者從此極棄車来者析其両軸騎馬來者暗其目歩  
行来者腫其足揚兵来者令自伏不敢起明星北斗却敵万里追我不止牽  
牛須女化成江海急々如律令

この内容を見ると、車の軸を折る・目を暗くさせる・足を腫らせるなど、ほとんど呪詛と言ってもいい文言が続き、その一方で、天門呪に見られるような地戸に関する記述は見られない。また、『小反閉作法』の一連の作法を見ても、ここまで攻撃的な文言が並ぶ呪は、ここ以外に見られない。刀禁呪に「千殃万邪皆伏死亡」、四縦五横呪に<sup>(37)</sup>「向吾者死留吾者亡」が見られるだけで、他には「退ける」あるいは

「避ける」というような表現がほとんどである。地戸呪ほど細かく一つ一つの状況を設定し、さらにそれに対応して呪詛めいた語が並ぶ呪は、『小反閉作法』中の他の次第には見られない。刀禁呪や四縦五横呪に見られる記述は「反閉局法」にも似たような箇所はあるものの、『反閉局法』のものには同時に病が癒える・欲しいものが手に入る・願いが叶う・赤子のように愛されるなどの記述も見られ、呪詛一辺倒ではない。また、『反閉局法』の地戸呪に該当する箇所を見ると、通常時の呪は閉塞された状況を打破するというよりも、閉塞してしまっている状況を正常な状態に戻そうとしているようにも見える。代わりに陣に入る場合の呪には呪詛めいた要素が見え、『小反閉作法』の地戸呪はこちらの方が近いと言えるだろう。

もし反閉が勝負事のみに用いられるのであれば、この内容でも当然と言えよう。しかし、反閉が用いられるのは勝負事のみではない。移徙法での説がどのようなものかは不明であるが、おそらく陰陽道祭でも『小反閉作法』記載の呪が用いられたと思われる。行幸に際してはおそらく「有来追我者」から「不敢起」までを省略すると思われるが、それでも「明星北斗却敵万里追我不止牽牛須女化成江海急々如律令」という文言は残っており、明星・北斗が却すべき「敵」というものを明確に設定している。

つまり、地戸呪の目的とは、これら自らに対して攻めてくる者、あるいは敵となる者が必要な何かであったのではないだろうか。地戸呪を整理すると次のようになる。

(i) 追ってくる者・・・遠ざける

(ii) 車で来る者……両軸を折る

(iii) 騎馬で来る者……目を暗くさせる

(iv) 徒歩で来る者……足を腫らせる

(v) 拳兵する者……自滅させる

(vi) 敵……明星、北斗が却する

先に見たように、「反閉局法」にも『小反閉作法』の他の呪にも「死」や「亡」など呪詛とも取れる語は数多く見られるが、自分に向かつてくるという一点に対して多くの状況を設定し、それを覆すような記述は見られない。いずれも盗賊や鬼魅、自分を捕まえるものや追ってくる者に対してであつて、車・騎馬・徒歩など、向かつてくる手段ごとに対しての記述はない。これは、反閉の地戸呪特有のものと思つてよいだろう。

では、これは何を意味しているのか。

一つの可能性として、ここに見える地戸呪こそが、反閉の主目的である「閉気の反転」を起こす、あるいは起こし始めている場面ではないかということが挙げられる。『小反閉作法』の①③で玉女に出行の事由を告げ、体内から神獣を呼び出し、神仏を勧請する。次に天門呪で天門と地戸を設定し、開く。そしてこれらの次第が行われた後に、地戸呪である。ここで、自らに向ってくる者や「敵」という表現で閉塞された状況を設定し、それを反すること、その閉塞された状況を覆していくのではないだろうか。

そうであるなら、地戸呪とは『小反閉作法』において非常に重要な位置を占める要素であると言える。そしてそうであるからこそ、この

部分の呪の内容を変更することによって、反閉の目的を変更させることができたのではないだろうか。

## 第二節 地戸呪から見た反閉の機能

『小反閉作法』の天門呪・地戸呪を解説してきたが、そこから導き出されることは、典拠である「反閉局法」が十干十二支などの方位・時間などに非常に厳格なものであるのに対し、『小反閉作法』においてはそれほど重要視していない点が挙げられる。典拠である「反閉局法」は遁甲式占に基づいて行う法であり、後に六壬式占の要素も取り入れたのにもかかわらず、『小反閉作法』の呪の内容からはそれらを思わせる文言はわずかなものである。

反閉が用いられた四種の状況のうち、先に見た「反閉局法」の用途から考えるのであれば、吉事吉方がない時の出行時（出行儀礼）と勝負事こそが反閉の本来の用途と言える。出行儀礼に分類される拝賀・着陣などは「反閉局法」の貴人上官を訪ねる場合に該当すると思われる。また、移徙法も出行儀礼の変形と見れば、一応の説明はつく。その一方で、「反閉局法」の用途で説明がつかないものが、陰陽道祭である。小坂氏は陰陽道祭の反閉は密教修法と関連して考察すべき問題が含まれるとしているが、ここでは『小反閉作法』の呪の内容からの考察を行う。

小坂氏の指摘する、反閉が確実に用いられた陰陽道祭は玄宮北極祭（賀茂氏では北極玄宮祭）、五帝祭（三皇五帝祭、三方五帝祭）、呪詛祭（呪詛返却祭）、荒神祓（荒神祭）、六道靈氣祭（靈氣道断祭・天獄

祭)の五種である。

このうち、玄宮北極祭は典拠に忠実であつたために行われたとされ、五帝祭は室町期の賀茂家のものとされる『文肝抄』<sup>(41)</sup>によると、五帝並四海神祭では反問は行うが、五帝祭では行わないとある。これも玄宮北極祭と同じく典拠が関係しているのかもしれないが、詳細は不明である。あるいは一つの可能性として、「反閉局法」の目的の一つである、貴人上官を訪ねるための法としての側面から、神に祈願するため、に用いられた可能性が考えられる。しかし、そうであるなら、神を勧請する祭祀全てに共通しているはずであるが、全ての陰陽道祭で反問が行われたわけではないようであるので、この点は不明である。

では、呪詛祭・荒神祓・六道靈氣祭に何故反問が用いられることになったのか。

呪詛祭は呪詛の返却、荒神祓は『文肝抄』によると荒神を祓う、そして六道靈氣祭は病氣の原因が靈氣と占断されたときに、その平癒を目的としている。これら三種の祭祀は、いずれも八木氏の指摘する反問の目的たる「閉氣の反転」というものとは無関係と思われる。八木氏は陰陽道祭などに反問が用いられることについて、祭を執り行うについて忌日を避けるためとしているが、これらの祭では必ず行うようであること、そして全ての陰陽道祭祀に際して反問が行われたわけではないようなので、八木氏論では行幸に関しては説明できるが、これら一部の陰陽道祭や勝負事などの必ず反問が行われるという状況に関しては、説明がつかない。つまり、これらの祭祀に反問が導入された背景には、何か他の理由があるものと考えられる。

小坂氏<sup>(43)</sup>によると、呪詛祭は呪詛祓いの儀式である河臨祓に反問が加入して祭に発展し、六道靈氣祭は鬼氣祭に反問が加入し、展開されたのであろうとしている。そして反問の加入は散供に対応したものとしている。しかし『貞丈雜記』の記述からは、反問は「悪しき方角をふみ破る呪禁」とあり、つまりは邪氣払いの機能を持つ呪術として受容されたようであつたことが窺えるが、では、何故反問がそれらの祭祀に加入されたのか。

このことについて小坂氏は、呪詛祭や六道靈氣祭などの展開型祭祀が反問を行うのは、中国の祭法などを典拠とせず、当時の実情に合わせて祭祀を改変・創出する際に、威儀を整えるための単なる呪術として利用したためとし、さらにそれは祓いや散供に付加したためとしている。では、何故付加されるものが反問でなくてはならなかったのか。

反問とは、典拠に基づくのであれば、天門地戸を通じて玉女に乗ること、他の境界に移動し、目的地まで安全に過ごすということが本来の役割であつたと思われる。しかしその一方で、陣に入る際に行われるということもあり、護身法としての側面も見える。しかしこれは「反閉局法」においてのことであつて、『小反問作法』においてのことではない。

呪詛祭の目的は病などの原因となる呪詛を返却するものであるが、そこには呪詛を行ったものが存在し、荒神祓では荒神という祓うべき対象が、そして六道靈氣祭は病氣の原因となる靈氣というものが存在する。これらから身を護るための法、もしくはその一要素として反問

が用いられたと考えられるが、そこに地戸呪に見られる呪の内容、つまり呪詛めいた文言や敵を却すという表現が関係しているのではない。つまり、呪詛や靈氣などを打開すべき閉氣として設定したのではないかということである。

あるいは他の呪に呪詛などの返却の機能が期待されたのかもしれないが、反閉が用いられたのであれば、そこに何か理由があるはずであり、また祭祀の威儀を整える呪術として取り入れられたとしても、やはりそれも反閉も持つ機能が必要とされたものと推測される。

また、密教側の呪詛返し<sup>(45)</sup>の法として六字河臨法が挙げられるが、これに関して『阿婆縛抄』<sup>(46)</sup>には中臣祓を読む間に大奴佐を振りながら唱える呪があるとされるが、それは『小反閉作法』の禹歩立留呪を一部省略した形のものである。一方、『覚禪鈔』<sup>(46)</sup>の六字経法にはそのような記述は見えないが、六字天が結ぶ輪印は陰陽反閉印という別名があるという記述がある。このように、呪詛を返却するに際して反閉が関係するのは、呪詛返却の機能の一部を担うことを期待されたと見ることができよう。

その理由が、地戸呪に見られるような呪詛にも護身法にも読める側面にあったのではないだろうか。

## まとめ

『小反閉作法』の天門呪・地戸呪を中心に分析を行い、それが何を示すのかを考察した。結果、天門呪は「反閉局法」における天門呪に

相当する箇所とはかけ離れたものであり、地戸呪に至ってはもはや呪詛と言っても過言ではない文言が続き、一部を除いては完全に別の呪と言える。しかし「反閉局法」はこの部分を変更することで目的を変えることができ、そして『小反閉作法』においても移徙法の説、行幸時には一部を省略するなど、目的に合わせて変化が見られるという点では似かよったものとなっている。

その地戸呪の内容から、反閉の目的である「閉塞された状況の打破」はここで行われる、あるいはここから始まっているのではないかとこの可能性が浮上した。また、反閉は貴人の出行に際しての邪氣払いとされてきたが、地戸呪の内容から呪詛などから身を守る、あるいはそれを返却しているというような要素が見え、単なる移動前の露払いの呪術とは言えない点が見える。この点から、移動に際して行われるはずの反閉が一部の陰陽道祭、特に呪詛祭・荒神祭・六道靈氣祭などの祓いの儀礼で用いられたのではないかと思われる。そして、このことが反閉が呪詛などからの護身法の一つとしての機能を期待され、理解されていった原因なのではないだろうか。

あるいは一つの可能性ではあるが、呪詛・荒神・靈氣などを返すべき場所に無事に送り返し、それらが帰ってくるのではないようにするために、移動に関する作法である反閉が用いられたのかもしれない。そして本来はそうように受容されていたものが、護身法として見られるようになったと考えることもできる。

いずれにしろ、反閉に呪詛などからの護身法としての側面が見られることは、『禁秘御抄階梯』に「身固者、反閉之略法也」という記述

のように、護身法である身固が反閑の略法と見られることとなった点に通じるものであろう。その要因が、地戸呪などの一連の呪ではないかということが、今回の地戸呪の解説から見えてくるものと思われる。

〔注〕

- (1) 反敗と反倍の表記については、及川真清「岩崎鬼剣舞について」(千田真清編『及川真清遺稿集』一九五一)より  
<http://www.kitakami.ne.jp/~bugone/index.html>にて公開中。
  - (2) 返閑 天子出御時陰陽家所行也又謂之禹歩也
  - (3) 反閑はヘンバイとよむ也、禹歩也。故にヘンバイをフムといふなり。陰陽家にあり。
  - (4) 反閑と云は神拝の時する事也陰陽家の法也(・・・中略・・・) 古代貴人出御の前に必陰陽師をして反閑を行はしむこと旧記に見へたり(・・・中略・・・) 我家伝来の書旗縫口伝といふ書に云へんばいふむ儀式ごへいをもち九字の文唱へ如此たるべし唱る列めぐる足の事
- 前九  
足右
皆五  
足右
闕三  
足右
右足
- 烈七  
足右
者四  
足左
臨一  
足右
- 陣六  
足左
兵二  
足左
左足
- 在八  
足左
- 右の如く見えたり臨兵闔者皆陣烈在前と云九字の文を唱ながら左右の足を踏み運ぶ事を云也(・・・中略・・・) 其悪き方角をふみ破る呪禁の方術を行ふ事を反閑をふむと云なるべきか將軍家など出行の前には必反閑を行ふ事は悪き方角をふみ破る呪禁なるべきにや
- (5) 折口信夫「日本芸能史六講」(『折口信夫全集』第一八巻 中央公論社

- 一九五五年)
- (6) 藤野岩友「禹歩考」(西岡弘編『中国古典の民俗と文学』一九八六年角川書店)
  - (7) 小坂眞二「反閑」(『民俗と歴史』第八号・第十号 一九七九・一九八〇年)
  - (8) 茅元儀『武備志』(『四庫禁燬書叢刊』子部 二〇〇〇年 北京出版社)
  - (9) 小坂氏が使用した『家秘要抄』は、東大史料編纂所所蔵写真。
  - (10) 『小反閑并護身法』(村山修一編『陰陽道基礎史料集成』東京美術 一九八七年) 所収
  - (11) 村山氏前掲書(10)
  - (12) 小坂眞二「陰陽道の反閑について」(『陰陽道叢書』4 一九九三年 名著出版)
  - (13) 酒井忠夫「反閑について」(『立正史学』一九八九年)
  - (14) 『正統道藏』洞神部方法類
  - (15) 玄武が真武に改称された年代については、窪徳忠『道教の神々』(平河出版社 一九八六年) より。
  - (16) 八木意知男「特殊歩行の儀」(『神道史研究』第三十八号 一九九〇年)
  - (17) 十節録曰黄帝與蚩尤合戰于坂泉之野蚩尤有鉄身黄帝ノ箭不中黄帝仰天祈之ヲ時玉女降自天反閑ス蚩尤ガ身如湯解テ被煞畢
  - (18) 内侍執劔靈候左右、無御反閑
  - (19) 斎藤英喜『安倍晴明』ミネルヴァ書房 二〇〇四年
  - (20) 斎藤氏の指摘は安倍泰忠が撰した一二世紀後半の書物である『陰陽略書』、及び賀茂家栄が撰した『陰陽雜書』(ともに中村璋八『日本陰陽道書の研究』汲古書院 一九八五年 所収) に見られる記述に基づいている。
  - (21) 繁田信一『平安貴族と陰陽師』吉川弘文館 二〇〇五年
  - (22) 田中勝裕「小反閑并護身法」の一考察(『佛教大学大学院紀要』三三

号 二〇〇五年

- (23) 西岡弘『叩齒考』(西岡弘『中国古典の民俗と文学』角川書店 一九八六年 所収)

- (24) 小坂眞二「陰陽師が反問をつとめるとはということか」(『ダ・ヴィンチ』二〇〇一年十月号)

- (25) 松村巧『天門地戸考』(吉川忠夫編『中国古道教史研究』 同胞舎出版 一九九二年 所収)

- (26) 『正統道蔵』 太平部

- (27) 『正統道蔵』 洞玄部威儀類

- (28) 『正統道蔵』 洞真部方法類

- (29) 『正統道蔵』 洞真部本文類

- (30) 『正統道蔵』 太清部

- (31) 『正統道蔵』 洞神部方法類

- (32) 『正統道蔵』 太玄部

- (33) 『抱朴子』のものは『遁甲中経』からの引用で、天蔵が天門のことであるとしている。

- (34) 『太上六壬明鑑符陰経』所収のものと『武備志』所収があるが、両者に相違点はない。

- (35) 小坂氏前掲論文(7)

- (36) 小坂氏前掲論文(12)

- (37) 刀禁呪 取刀可頌

吾此天帝使者前使執持金刀令滅不祥此刀非凡常之刀百鍊之鏹此刀一下何鬼不走何病不愈千殃万邪皆伏死亡吾令刀下急々如天帝太上老君律令

- (38) 四縦五横呪

四縦五横禹為除道蚩尤避兵令吾周遍天下帰還故郷向吾者死留吾者亡下急々如律令

- (39) 小坂氏前掲論文(12)

- (40) 小坂氏前掲論文(12)

- (41) 村山氏前掲書(10) 所収

- (42) 八木氏前掲論文(16)

- (43) 小坂氏前掲論文(7)

- (44) 小坂氏前掲論文(7)

- (45) 『六字河臨法』(『大日本佛教全書 阿婆縛抄』佛書刊行会 一九二二年)

- (46) 『六字経法』(『大日本佛教全書 覺禪鈔』佛書刊行会 一九一四年)

(47) 鎌倉期の『禁秘抄』では行幸において反問の他に身固を行うことは例とすべきではないとしているのに対し、江戸期の『禁秘御抄階梯』では身固は反問の略法であるとしている。小坂氏前掲論文(12)では、反問の代わりに身固が行われるようになるのは鎌倉期以降のこととあるが、少なくとも『禁秘抄』成立までは身固は反問の略法という理解はされていなかったものと思われる。

(たなか かつひろ 佛教大学研究員)

(指導：斎藤 英喜 教授)

二〇〇六年十月十九日受理

